

福島県ビックパレットにおける女性専用スペースの運営に関わって

郡山市婦人団体協議会会長

小林 清美

はじめに

帰りたくても帰る所のない人がいます。震災でたくさんの方々が、ふるさとを離れて不便で不安な避難生活を送っています。また風評被害を受け、放射能と言う目に見えないものと戦っています。福島県ビックパレット一階、多目的ホールに女性専用スペースがオープンしました。

1 オープンのきっかけ

(1) 女性たちの声として

- 着替える場所がない（トイレや布団の中で着替える）
- 男性の目が気になる（化粧、授乳等しにくいなど、女性が困っている

県庁避難所運営支援チームが避難所内に女性専用スペースを設置しました。県庁支援チームから依頼を受け、福島県男女共生センターが運営を開始しました。長澤涼子副主査が担当して避難者のよき相談相手となりました。その後、郡山市男女共同参画センターの紹介で、福島県男女共生センターから郡山市内の女性団体に協力依頼がありました。三団体が日替わりで担当することになりました。

(2) 運営団体

- 郡山市婦人団体協議会
- 女性の自立を応援する会
- しんぐるまざあずふおらむ・福島

2 女性専用スペースの目的

- (1) 避難所で生活する女性たちの安全・安心の確保
- (2) 避難女性と地元（郡山市）の女性たちとの交流

3 女性専用スペースの運営

- 午前9：00～午後9時間で、12時間自由に使用できます
- 女性スタッフがいます
- 机、イス、応接セットが置かれ、お茶・コーヒー、菓子等も自由に飲食できます
- カーテンで仕切った個室があります

授乳室、更衣室として使えるように、内鍵がかかります。着替え、お化粧するときは、ドライヤーも使用できます。体を拭きたい時に使えます

- お子さんの夜泣きがひどいときに使えます
- 男性の目が気にならない場所で、ほっとしたいとき使えます
- おしゃべりがしたいときおしゃべりの相手がいます
- 男性は入室禁止、小学生の男子は、保護者の女性と一緒に入室できます

4 郡山婦人団体協議会の取り組み

- (1) 水曜日・日曜日、午前9：00～午後21：00まで、14単婦でローテーションを組んで対応している
- (2) スペース内の洗い場へ来る人に、声をかけ、名前、町村名をお聞きし、名前で呼ぶようにスペースに入りやすい雰囲気づくりに気をつけました。
- (3) 多くの方々に利用してもらうため、スペース宣伝のチラシを持ち、小箱に飴を入れて二人一組となり、いつも笑顔でお誘いの声かけをしました。
- (4) 同じ目線に立ち、一生懸命話を聞くこと、苦しいことを吐き出してもらうことを思いました。 なかなか励ましの言葉ありません。 話すことで気持ちが楽になったところで、わたしたちの元気や笑顔を分けてあげたい。
- (5) 「ものづくり」にもお誘いしました。 諸々手先を動かすこと、針を持つこと、編み棒を動かすことにより、自分に戻れるという声もありました。
 - 和紙で折り紙、小箱作り、香り袋（フェルトとラベンダー）、根付け、アクリルたわし、ふくろう、カエルの人形作りなど
- (6) 「料理作り」（公民館調理室、地域婦人会担当）募集中 6月16日、25日
あたたかいご飯に納豆をかけて食べたいという声にこたえて、料理を作っていただく計画を立てました。
- (7) 避難所の方々が、避難所を出ても地元郡山女性との交流を続けて欲しいと言う県の目的に私たちはこのスペースの支援に関わったことを大切に交流を続けていきます。

5 専用スペースにある来室者のノートから

- 専用スペースが出来て安心しました。
- 部屋の様子も違っていてうれしい
- あたたかいコーヒーが飲めてうれしい、ほっとする。リラックス・発散できる。
作ってくれてありがとう
- 我が家にあるようなスペースが出来て、安穩感がある。
- 自分の時間、自分を出しきれる。肩に力はいらない。
- 勇気・元気も他人様からいただける。幸せいっぱい。
- 命がある、生きていることでいいのかなあと疑問もありましたが、女性のスペースは宝です。
- この部屋の設置を頂きましてありがとう。義理の親との生活している毎日なので、抜け出してゆっくり出来てよかった
- この部屋に来るのがとても楽しみです。誰かに逢える、会話がはずみ、憩いの場です。
なんとなく体、精神的に何が疲労なのかわかりません。この部屋に救われます。
ビタミン剤です。

女性の癒しの場、ほっとできる場、心の元気をとりもどせそう、こんなつぶやきが・・・
専用スペースがこんなに喜ばれて、運営担当者団体として協力できたことをうれしく思います。

6 現状と課題

現状は

- (1) 避難生活が長くなるにつれて、避難者同士の人間関係にひずみが出てきている。
- (2) 生活環境の差もあらわれています。(アパート、仮設住宅に入れない人もいます)

課題は

- (1) ふつうの生活に近づける環境づくり
- (2) 市の施設、男女共同参画センター、小学校区にある講座等に参加して友人をつくる
- (3) 地域イベント等に参加し、人間関係をつくる。住民同士の交流をする
- (4) 打ち込めることを見つける
- (5) 仮設住宅の生活をどうしていくか、地域のつながりを大切にする
- (6) 避難所を出ても地元郡山女性との交流を続けていく、かかわり続けていく。

避難所に女性の専用スペースが必要だった理由（わけ）

ビッグパレットふくしま避難所県運営支援チーム

天野 和彦

2011年4月11日。当時、2000名を超える被災者を収容していた郡山市にあるビッグパレットふくしま避難所に特命で、常勤の責任者として赴任してきた私は、館内の光景に驚きを隠せなかった。

それまで、相馬市のある避難所での運営支援を行ってきた私は、自治活動を基礎において文化活動も含め様々な取組みを展開してきた。厳しい日常であっても、表情も豊かになりつつあった相馬の入所者の方々とあのあまりの違いに愕然としたのだ。

ほとんど表情がなく、無気力に硬いコンクリートの上にじっと身を横たえている人々。その姿を目の当たりにしたとき、「人権の問題だ」そう率直に感じた。

当時の避難所内は、ノロウィルスなど感染症も蔓延しつつあり、入所者の方々の命を守ることが最優先の問題でもあった。

併せて、避難所内での無軌道な行動等もみられ、館内でくつろいでいる女性に対し、からかいなどの面白半分の男性の行動に怯える女性もかなりいることが分かった。また着替えなどの問題も潜在化していた。つまり着替える場所がないために、トイレや車の中などで隠れるようにほとんどの女性が着替えていた。

こうした集団生活の中にあっても、人権はきちんと守り抜かなければならない。

さっそく各運営セクションから問題のヒアリングを行い、女性の専用スペースとして使える場所を確保した。しかし、場所だけ確保しても、それは本当の意味で女性の専用スペースを設置したことにはならない。人の配置があってはじめて生きたスペースになる。すぐに、県男女共生センターに依頼をした。彼らは即座に視察に訪れ、彼らのネットワークを活用して運営をすることを決めた。男女共同参画に精通しているNPO、婦人会、サークルなどの各団体が集まり、入所者の女性が安心して過ごすことができるスペース運営の具体的な方策を練った。

現在、女性の専用スペースは、利用者によってその活用方法も広げながら多くの入所者女性の癒しと潤いの場になっている。

今回の取り組みは、避難所が抱える課題を、専門機関との連携によってこそ、適切で効果的な課題解決ができるという道筋を示すことができた。まだまだ避難所や仮設住宅でも、孤立化をはじめとする人権にかかる課題は多い。さらにネットワークを広げながら、持続的な課題解決のための方策を続けていきたいと考えている。